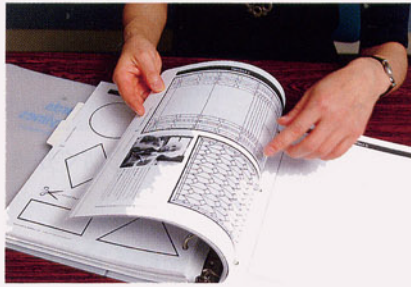


(写真：左上は稲垣雅子、左下・右は柳生 貴也)



上は児童館を使った予行のワークショップ。下は「Schoolyards to Skylines」。翻訳ボランティアを募り、20人以上の協力で作業中。稲垣氏のHPは<http://www.therapists.jp/artemis/>



ジャンクに囲まれがちな子どもに「本物」に触れる機会を与える。教育プログラムの考案にも着手

稲垣雅子氏 × 親子で木と触れ合うものづくり

一方、この8月、「親子で木と触れ合うものづくり」と題する催しを東京・晴海のトリトンスクエアで開くのが稲垣雅子氏（フォーリングライト代表）。設計事務所や出版社に勤務した経験を持つが、学生時代からずっと、建築の文化的な側面に対する興味が強かった。偶然知り合った工務店の棟梁に協力を仰ぎ、「子どもたちに、本格的な大工さんの技術や本物の木に触れてもらう機

会」を設ける活動を始めた。

並行し、米国シカゴの教育機関が小中学生用にまとめた「Schoolyards to Skylines」を読み解き、日本向けのプログラムとする試みに乗り出した。このテキストは、実在する建築を生きた教材とし、国語、算数、理科、社会、美術といった章立ての中で街や社会を考える力が自然と身につくように工夫したもの。「飛騨高山の地場産業などと連携させれば面白いものになる」。

東京・神田神保町で生まれ育ち、街に強い愛着を持つ。その思いが原動力の一つだという。「ジャンクフードを避けさせたい気持ちと同じ。早くから本物の良さを伝えれば、建築に進まなくとも街や環境を長期的な視野で考える人間が育つはずだ」（稲垣氏）。

トリトンスクエアの催しは、定期化できる見通しがついた。リタイアした様々な分野の職人を巻き込むことなども視野に入れ、歩み始めたところだ。